＊＊＊＊＊＊あなたの町の情報誌＊＊＊＊＊＊

住まいル新聞

日本ステンレス工業株式会社
発行/日本ステンレス工業株式会社
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1
電話=0554-22-2500
FAX=0554-22-5234
Vol.140 2011 5月号

大月人物伝　真実一路の人生　小泉　好子

好子は七保町葛野の旧家、小西屋に生まれた。その成人後の生涯を通観してみると、地元における十三年間の教員時代、夫と共に関東各地を転住した十二年間の専業主婦時代、戦後約二十年に亘る婦人会、福祉、政治などの社会活動の時代及び病後十年の闘病生活に大別することができる。

彼女は明治三十五年三月十六日、七保町葛野二七八三番地に、父小泉喜一郎、母のぶの次女として出生、葛野尋常高等小学校を卒業するや甲府の山梨師範学校に進学した。ちなみに、姉じゅんは村内で唯一人の助産婦として多くの婦人達の信頼を勝ち得ていたし、弟・善信・武雄・妹、信代は何れも教員の道に進み郡内教育のために力を尽くした。

好子は山梨師範学校に入学後、甲府で寄宿舎生活を続けながら勉学に励み女子部の級長なども務めて、大正十年三月に同校を卒業、郷里の葛野尋常高等小学校の訓導となった。

大正十四年四月九日、同村葛野二七八九番地出身の小泉一男と結婚した。夫が税務署勤務で単身赴任状態の上、婚家の義母が病弱だったため、長男春樹を実家に預けての教員生活が続いた。昭和八年四月より笹子小学校に転住、学校近くの民家の一室を借り約一年間、母子二人の生活を送った。この時の担任生徒の中には後の山梨県知事天野建や大月市教育長を勤めた天野文雄がいる。

昭和九年三月、夫一男の茨城県下館税務署関税課長への転勤を契機に教職を退き、専業主婦として、夫と共に茨城県の下館・群馬県高崎・東京の馬込と転居を繰り返した。

この間に、次男保夫・三男欣也・長女幸子（ゆきこ）をもうけたが、幸子は夫が海軍軍属司税官としてグアム島に出向中、ジフテリアにかかり他界（一歳四ヶ月）その後、昭和十九年七月次女智恵子が生まれた。

昭和十九年戦禍が激しくなるにしたがい、当時税務講習所（現税務大学）の教授であった夫と長男を東京に残して葛野の婚家に疎開し終戦をむかえたが、馬込の家は昭和二十年五月二十四日の空襲により消失してしまった。

終戦直後、戦時中の国防婦人会は解散し、昭和二十二年五月九日新生七保村婦人会が創立され、好子は幼な子三人（次男保夫十一歳・三男欣也八歳・次女智恵子三歳）を抱えながら会長に推され、初代七保村婦人会長として婦人会活動の第一歩を踏み出した。

それから約一年後、第一回山梨県教育委員会委員の選挙が行われた。生まれてはじめて、主婦の座を守りながら婦権の獲得をめざしたこの選挙で男性の向こうをはることのむずかしさ、苦しさを味わいながらも結果として高山候補の最高点当選の栄誉を勝ち取ったのである。

初めて味わった選挙の喜びに力を得た婦人達の「会長さん、今度は村会の選挙をしましょう。会長さんが立候補をして、私達が旗をかついで廻る。そうして正しい選挙をしてみせましょう」という声に推され、また当時は珍しかった町村段階での女性議員候補ということもあり、新聞がいち早くこれを書き立てるなどの社会的反響もあって好子は出馬を決意した。

狭い地域の身近な選挙のため、名乗りを挙げる候補も好子のつながりをもつ者ばかり、その上、村長選とからんで村が完全に二つに割れた激しい選挙であったが、その結果は見事村議会の席に初めて婦人の座を獲得したのである。心ある婦人たちが一体となって闘い取った村会議員の座は当時の七保婦人会員の胸に誇り高く刻まれ県下から注目された。

「女の議員に何が出来る」などというそしりを耳にしながらも好子は議会の浄化に、明るい村政にと婦人代表の誇りを胸に、校舎や講堂の建設・道路その他の議題に対しても全力を注いで取り組んできたが、ここに七保村の将来を左右する重大な問題が持ち上がってきた。町村合併問題である。当時、県下でも大村であった七保村は賛否両論が伯仲し揺れに揺れた。好子の意志を決定させたのは「大同団結しないと、取り残されるのではないか」という青年の声であった。好子は合併賛成の議員の一人に踏み切った。議決の際は男性議員が真っ二つに割れた中、唯一人の女性議員として、そのキャスティング・ボードを握り（議長を除く議員は二十一名）合併への原動力となった。

次ページへ続く

大月人物伝
歴史探訪

真実一路の人生　小泉　好子

その後、地域の大村、七保の動向を注目していた他町村も相ついで合併に踏み切り大月市の誕生となった。その年の村祭りには「合併賛成の議員の家へ御輿をねり込め」という噂が入ったとか、大月警察署から四、五人の係官が彼女の家の離れに待機したというエピソードもある。

大月市誕生とともに北都留郡連合婦人会は解散、上野原・西原・小菅・棡原・丹波山地区が郡連の名を継承し、新たに大月市連合婦人会が誕生し好子はその副会長に推された。

その直後、当時公選制であった第一回大月市教育委員選挙にあたり、先の敗戦の償いを大月市婦連で、と考えていた藤本・星野等の幹部は連日協議の末「公明選挙の遂行」と「教委の座に母親の代表なかるべからず」を旗印に、好子を立候補者に推し闘いを開始した。

主婦が朝早くから夜遅くまで家を空けて選挙活動に、遊説にと走り回った好子の家は混雑を極め、出入りする支持者の対応や雑事に追われた。

夫一男は「俺に断りなしに出馬するなんて、こんな馬鹿な話はない」などとこぼしながらも、選挙一ヶ月前に長男に嫁いできた嫁郁子をはじめ親戚一同や婦人会員及び志を一つにする人達の応援を得て妻を支え、この選挙を乗り切ったのである。

その結果、好子は二位を千二、三百票も引き離し、五千数百票の最高得票で当選、しかも選挙費用は十四、五万円という法定費用内であり、ここに大月市婦連会員個々の自覚と努力の賜であった。

しかし、市教委にトップ当選した翌年、法律の改正によって教育委員が首長の任命制となり、女性委員一人が決定するや「女性の代表がいれば私でなくてもいい」と好子は平然と座を譲り、他の活動にこの傍ら、かって教員で経験から久しぶりに故郷で戦後の混乱や荒廃により野放しにされて供達について心を痛めたが、若い母親達が追われ婦人会の会合会にも参加できないて、母親に対する教児教育の必要性を痛「子供は私が預かるお母さん達は勉強し実母のぶを口説き落実家の協力を得て、を開放し「ふたば保をつくり、地域の幼にも力を注いだ。

また昭和二十七年、七保村最初の婦人民であった実母が急逝後をうけて推薦されて員となり、福祉関係の活動も始まった。婦人会活動の基盤があったためか以後、母子相談員、県青少年対策審議委員、県婦人少年室協助員など次々に務め、昭和三十七年四月には山梨日々新聞社から「山日生活文化賞」を受賞している。

昭和三十八年、大月市会議員選挙の応援演説中にクモ膜下出血に倒れた夫一男は一年二ヶ月の闘病生活の後、昭和三十九年九月七日、六十七歳で他界したが、この間、好子は諸活動に奔走、帰宅後は自宅において家族と共に毎夜深夜に至るまで、本人に言わせれば「生き地獄」のような夫の看病を続けた。

その翌年四月、県婦連の大会において副会長に推された好子は、予ねてから県下婦人の念願であった県の婦人会館の建設に積極的に取り組み、会長及び他の幹部達と協力、零細な基金を県下の会員から集め、努力を続けた結果、五千萬円をかけた県婦人会館が完成した。

昭和四十三年度の県連婦人会の役員改選の折には、新築になった会館に集った郡市連の会員に満場一致で会長候補に推薦されたが、その後、甲府駅頭における代議員争奪の醜さを見て「こんな婦人会はいらない」「皆さんの御心は涙の出るほど有難いが私は会長になるために県にいたわけではありませんから」「私には、私達の作った村の婦人会があり、忘れられない婦人会のおばさん達が私を待っていますから」と惜し気もなく辞表を提出、その後は地元七保での婦人会活動に専念、その活動は昭和四十六年九月十八日二十二時脳出血で倒れるまで絶え間なく続いた。

三日間の昏睡から覚め病床についた後の約十年は婦人会や社会活動から退き、専ら家で過ごし病床でも出来る俳句などを始め、地元の葛野句会へ投句したり、時折訪ねて来てくれる友人との会話や孫達の成長を楽しみに静かに暮していたが、昭和五十五年十二月十九日の深夜、前日よりの風邪気味を心配して起きてきた長男春樹、嫁郁子と言葉を交わした僅か五分後の午前二時四十五分、二人に見守られながら眠るように静かに息を引きとった。

享年　七十九歳
法名　清川院直心妙好大姉

今は郷里、七保町葛野の徳巌山福泉寺裏手の墓地に永遠の眠りについている。

資料提供　親族

執筆者　仁科義民